

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：20101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19764

研究課題名（和文）高齢者ケア施設における本人・家族・専門職が協働するACP看護支援モデルの構築

研究課題名（英文）Development of an Advance Care Planning Support Model for the Older Adults

研究代表者

中村 円（NAKAMURA, Madoka）

札幌医科大学・保健医療学部・講師

研究者番号：10737505

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高齢者の意思決定を支援するための概念としてAdvance Care Planning（ACP）に焦点をあて、実装にむけた看護支援モデルを構築することを目的とした。国内外の文献検討を重ねた結果、高齢者の「生活」に着眼した意思決定の重要性と、それを支援する必要性があると考えた。本研究では、地域在住高齢者へインタビュー調査を実施した。高齢者の生活における意思決定のプロセスを明らかにし、ACPを推進するための看護支援モデルの構築に向けた示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、高齢者の生活における意思決定の様相を明らかにすることができた。人生の最終段階に焦点を当てたこれまでの意思決定に関する研究とは異なる視座から、生活者としての高齢者が自分の暮らしをどのように持続させようとしているのか、そのために何をどのように選択し、決定しているのかを明らかにしたことに意義があると考えられる。このことは、高齢者本人の選択や決定を基盤とした地域包括ケアシステムを推進する上で、重要であるといえる。今後は、この意思決定のプロセスをACPとして専門職がどのように支援していくのか、具体的な実践と評価が必要である。

研究成果の概要（英文）：This study focused on Advance Care Planning (ACP) as a concept to support decision-making for the older adults, and aimed to develop a nursing support model for implementation.

After reviews of domestic and overseas literatures, the importance of decision-making focused on the "life" of the older adults and the need to support such decision-making were considered. In this study, we interviewed older adults living in the community. The decision-making process in the lives of the older adults was clarified, and suggestions were obtained for the development of a nursing support model to promote ACP.

研究分野：看護学

キーワード：アドバンス・ケア・プランニング 意思決定支援 高齢者

## 1. 研究開始当初の背景

- 1) 医療システムの転換期にあるわが国では、高齢者ケア施設での看取りの増加が見込まれる。また、エンドオブライフケアの領域では最期まで自分らしく生きるための実践として、Advance Care Planning (以下、ACP) が社会的にも注目され、本人の意思を尊重したケアが重要視されている。しかし、高齢者ケア施設においては、認知機能の低下や予後予測の困難さといった高齢者の意思決定に関する課題を抱える現状があった。そのため、研究開始当初、本研究では高齢者ケア施設における ACP 看護支援モデルを構築することを目的として研究を開始した。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行により、高齢者ケア施設における研究活動がきわめて困難な状況に至った。そこで、本研究では地域在住高齢者に対象を変更し、地域で生活する高齢者が自分の生活を継続するためにどのような意思決定をしているのかを明らかにし、高齢者が自分らしく生きるための意思決定支援の方略としての ACP のあり方の検討を目指すこととした。

- 2) 超高齢化社会が進行するわが国では、本人の意思を尊重した質の高いエンドオブライフケアが課題となっている。これまで高齢者の意思決定に関する研究は、人生の最終段階である終末期やターミナル期に焦点化されてきた。一方で、本邦が推進する地域包括ケアシステムには「暮らし」の要素が組み込まれ、住み慣れた地域での暮らしにエンドオブライフケアをどのように融合させていくのが新たな課題となっているといえる。

また、地域包括ケアシステムの基盤には本人の選択と決定がある。高齢者が暮らしの中で自分の意思をどのように表明し、選択し、決定しているのか、生活に焦点を当てた意思決定をどのように支援していくかについては明らかになっていない。したがって、本研究では地域在住高齢者の生活における意思決定のプロセスを明らかにし、自分らしく生きるための実践としての ACP を支援者がどのように実装していくことができるかを検討する。

## 2. 研究の目的

地域在住高齢者が自分らしい生活を継続するためにどのような意思決定のプロセス辿っているのかを明らかにし、そのプロセスを支援する方略としての ACP のあり方を検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### 1) 研究デザイン

グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的記述的研究デザイン

### 2) 研究対象者

研究対象者の次の ~ の条件を満たす者とした。慢性疾患を有する 65 歳以上、要支援 1 から要介護 2 の認定を受けている、地域包括支援センターまたは、居宅介護支援事業所を利用している、対象候補者の募集時から遡って 1 年以内に、ケアプランの作成または変更をしている、日常的な会話が可能であり、認知症の診断がされていない

### 3) データ収集方法

研究者が作成したインタビューガイドを用いて、研究対象者に半構造化面接を行った。面接の内容は基本属性のほか、高齢者が生活における意思決定として、自分の固有性や大切にしていることを明確にし、他者に意思を伝えたり委ねたりしながら、自分の生活を整えることについて、何を感じ、考え、判断し、行動してきたのか、その結果として何を得てきたのかという経験を当事者の視点から明らかにした。補足の質問をしながら参加者の話の流れに沿ったオープンな質問で語りを引き出した。研究対象者の許可を得て IC レコーダーに録音し、逐語録にしてデータとした。

### 4) 分析方法

データの分析では、継続比較分析を用いてデータ収集と分析を並行して進め、抽出されたデータの類似や相違、関係性の観点から比較し分析した。また、分析のプロセスから導出される主要な概念や構成概念をつなぎ、説明するストーリーラインを記述し、概念同士の関連を把握した。

## 4. 研究成果

### 1) インタビュー調査の実施

14 名の研究対象者 (男性 9 名、女性 5 名、平均年齢 84.9±8.27 歳) にインタビュー調査を実施した。

### 2) 地域在住高齢者が自分らしい生活を継続するための意思決定プロセスの構造化

地域在住高齢者が自分の生活を継続するための意思決定のプロセスは、「日々の生活において不自由さや限界に直面しながらも自分の暮らしを継続するために自分の健康状態や気持ち、周囲の人々との関係性とバランスを取りながら現実との折り合いをつけていくプロセス」である

というコアカテゴリーが見出された。高齢者が自分らしい生活を継続するための ACP の実践には、高齢者が自分の健康状態や価値・信念、周囲の人々との関係性とバランスを取りながら自分の暮らしを安定させるための選択と決定ができるように支援する必要があることが見出された。この結果は、インタビュー調査により抽出された 213 コードを、46 サブカテゴリーから 10 カテゴリーに集約したもので構成された。

### 3) 考察および結論

本研究の結果から導かれた意思決定のプロセスは、思い通りにいかない日々の暮らしの中で、高齢者が自分自身の健康状態や周囲の人々との関係性、大切にしてきた価値や信念との相互作用の中でバランスを取りながら、自分の暮らしを継続するための方法がわかっていく、現実との折り合いをつけて納得していくプロセスであった。本研究により見出された知見は、老いや疾患に起因する身体機能の変化により、抗うことのできない喪失を経験している高齢者が、葛藤や試行を繰り返しながら、自分の生活を持続させようと模索する中での選択や決定のありようであると考えられた。

ACP の実装に向けては、高齢者が何を大切に生きて、日々変化する高齢者が暮らしの中で、その都度何に価値を置き過ぎているのか、そして、どのように未来を見据えているのかに着目し、日々の生活援助などを通して意図的に把握しようとする姿勢が必要であると考えられた。これは ACP をファシリテートする専門職のコンピテンシーにも通ずるものといえる。また、意思決定支援のプロセスにおいては意思表示、意思決定、意思実現のそれぞれの段階が重要であるが、とりわけ ACP を支援する上では対話にもとづく高齢者本人の意思表示を大切にしていく必要性が示唆された。高齢者を擁護されるべき対象や脆弱な存在として捉えるのではなく、これまでの人生の過程で獲得してきた能力や生きる力、自己理解にもとづく知恵や工夫といった選択肢をもつ生活者としてとらえ、繰り返しの対話によって意思の表明を引き出すための支援が重要であるといえる。

研究の限界として、当事者である高齢者の意思決定プロセスを明らかにすることはできたが、ACP の実践者である専門家に対するモデルの構築と提案までは達成できなかった。ACP の実装化に向けて、次の課題として研究を継続する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中村 円	4. 巻 44
2. 論文標題 退院に伴う意思決定支援における病棟看護師と退院調整看護師の役割認識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6. 最初と最後の頁 99 ~ 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15065/jjsnr.20200702099	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中村円、長江弘子
2. 発表標題 慢性疾患を有する在宅療養高齢者が自分らしい生活を継続するための意思決定プロセス
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村円、長江弘子
2. 発表標題 転倒により半年間の入院を経た80歳代女性が一人暮らしの生活を再編していくプロセス
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会 第4回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村円、長江弘子
2. 発表標題 在宅療養高齢者の生活の場における意思決定の概念分析
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Madoka Nakamura
2. 発表標題 Decision-Making for Cancer and Non-Cancer Patients; Focus on Expressing Preferences of Elderly Japanese Patients
3. 学会等名 International Conference on Cancer Nursing 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 M. Nakamura, H. Nagae, M. Nasu, A. Yamada, M. Aoyama, K. Chiba, Z. Takahashi
2. 発表標題 Scoping Review on How Compassionate Communities Promote Advanced Care Planning for Healthy People
3. 学会等名 EAPC 18TH WORLD CONGRESS 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村円、長江弘子
2. 発表標題 後期高齢者が自宅での生活を継続するための意思決定の様相 - 老いと向き合いながら暮らすA氏の事例から
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会 第5回学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大城 京子、清水 直美、瀬口 雄一郎、長江 弘子、西川 満則、横江 由理子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 南山堂	5. 総ページ数 162
3. 書名 生活の場で行うアドバンス・ケア・プランニング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------